キズナエピソード

遊部 いろは　2話

//ADV形式開始

//渋谷

［花織］

「この辺に来たらまずは

フローズンポップコーンの「反乱軍」だよね！

さあ、た～んとお食べ！」

［とびお］

「え、これただのポップコーンだよな？

ほんとに食えんの？

名前すげぇんだけど……」

［いろは］

「うわぁ～！

アイスとカラフルなチョコ……！

天国みたい！　ほとぜにっくだねぇ！」

［とびお］

「フォトジェニックな」

［花織］

「ん～っ！　おいひ～っ！

これぞ反乱～っ！」

［いろは］

「お口の中で何かが戦ってる……！

どうしよう、お口の中でポップコーン

弾けちゃわない!?　パンッて！」

［とびお］

「いや、もう全部、弾け終わったやつだからな。」

［花織］

「あ、『背徳のカップケーキ』って知ってる？

ウチ、こないだあそこのお店に

二時間も並んで……。」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

途端に花織の声が小さくなる。

花織が指差した先に、カップケーキの店はあった。

そしてその店の前には、しゃがみ込んだ酔っぱらいの姿も……。

//次ページ

「よ、よりによって何であんなとこで～……」

花織が嘆くのも無理はない。

酔っぱらいのおっさんは、泣きながら何かを言っていて、

通りを行き交う人達の視線を集めてしまっている。

あれではかなり近寄りがたく、店にも少し入りづらい。

//次ページ

「……とびお、ごめん。コレ持ってて」

いろはに反乱軍を押し付けられるように手渡され、

思わず受け取ってしまった。

「え？　いろは？」

いろはは真っ直ぐおっさんのほうに向かっていく。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［いろは］

「おじさん、つらいの？

だいじょーぶ？」

［とびお］

「おい、いろは、やめとけよ……！」

［いろは］

「なんで？　だって、泣いてるよ？」

［とびお］

「泣いてるって言っても、酔っ払いだろ？

泣き上戸ってやつじゃねえか？」

［いろは］

「でも、悲しいんだよ？

一人で泣くのって、つらいよ？」

［花織］

「あ～ダメダメ、とびおくん。

いろははこうなったら、てこでも動かないから……」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

いろははおっさんを立ち上がらせようと、両手を取っている。

……どうして他人のために、そこまでするんだろう。

理由は何であれ、いろはの姿はなんだかとても……立派だ。

対して、ポップコーン両手にただわめくだけの俺って、

すごくかっこ悪いんじゃないか……？

//次ページ

「ごめん花織、これ全部食っていいよ」

「え、え、え？」

思わず花織に反乱軍をすべて預けた。

おっさんの肩を腕を回し、立たせてやる。

お、重いし酒くさい……。

//次ページ

「とびおっ……！　ありがとう……！」

いろはの表情がぱあっと明るくなった。

いろはも、俺の反対側に回っておっさんの肩を組む。

「とりあえず、もうちょい人混みから離れて……。

酔いが覚めるまで一緒にいてやるか」

「うんっ！」

//次ページ

おっさんを抱え直そうと背中に腕を回した瞬間、

いろはの手に触れてしまった。

たったそれだけのことなのに、心臓が跳ね上がった。

し、心臓止まれ！　いや、止まったら死ぬっ！

この妙な緊張、焦り、高揚。なんなんだ！

//次ページ

俺はいろはに恋でもしてるってことなのか？

こんな酒くさいおっさんを間に挟んで、

ロマンチックもへったくれもないというのに。

でも……危なっかしいほど優しいいろはは、魅力的だ。

そこは、認めなきゃいけないな……。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話END